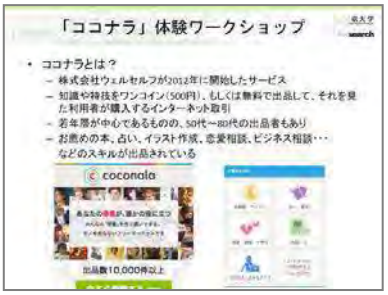
こちらがそのサイトの紹介のビデオになっているんですけれども、３種類の文字校正を、こういうインターフェースを通じて認識間違いをやっていって、今ビデオに出ているのが、いろいろな人が全国から自宅のＰＣを使って作業をやっている様子ですけれども、色が点滅している人が今まさに作業をやっている人。その作業が進むと、こういう形で電子図書がどんどんどんどんつくられていっているという、その作業の流れを可視化したものになります。



○シニアのクラウドソーシング

次に御紹介したいのが、オンラインスキル出品というワークショップを柏のシニアコミュニティの方たちと一緒にやりました。最近普及し始めてきている新しい仕事をする形態として、クラウドソーシングというものがございます。

クラウドソーシングというのは、一つの仕事をたくさんの人が分業して一気にやってしまおうというような、そういう考え方なんですけれども、「ランサーズ」という会社だったり、「クラウドワークス」さんという会社などが大きいところで有名ですけれども、今回ワークショップとしてシニアの人たちに紹介したのが、一番右側にある「株式会社ウェルセルフ」で、最近「ココナラ」というふうなサービス名に名前が変わりました。ココナラさんの、ワンコインで１人１人の特技を出品するというサービス、こちらをシニアの人たちに紹介いたしました。

こういうクラウドソーシングのサービスは、若い人ではかなりたくさん小遣い稼ぎでやっている人たちが多いのですが、シニアの人たちにはなかなかこういうサービスがあるということを紹介する機会もないので、もしかしたら面白いことになるのではないかと思ってワークショップを開いてみました。ココナラさんというのは、正しくは「株式会社ｃｏｃｏｎａｌａ」が 2012 年に開始したサービス、ワンコインで自分の特技を出品すると。若い人が中心なんですけれども、提供される得意の内容としては、お薦めの本の紹介、占いをします、イラスト作成、恋愛相談、ビジネス相談、そういったものがあるんですけれども、柏キャンパスの部屋を借りて、こういう感じで十数名のシニアの人たちを集めて、お弁当などを食べながらワークショップを行いました。

シニアの人たちってとても奥ゆかしくて、出品できる得意は何ですかと聞いても、「いや、私にはそんな出品できるような得意などありませんよ」というふうにおっしゃるのですけれども、グループワークなどをして、人生の棚卸しをお互いにやりながら、得意なもの、あなたならこういうものが出品できるんじゃないのというのを推薦し合うような形にすると、いろいろなものが、いろいろなアイデアがその場から出てくるようになるんですね。例えば、海外事業の経験がある人は、その海外事業の実際についての主観を伝えますよとか、介護の経験がある方は、働きながら介護をする方法を教えますとか、シニアの登山の続け方、それから行政文書の校正をしますというふうに、過去の経験をうまく生かすような得意を出品される方がいらっしゃいました。

こちらがシニア出品第１号の方で、まさにクリックをして出品した瞬間の興奮冷めやらぬ笑顔なのですけれども、このワークショップをやって本当によかったなというのは、この笑顔がもらえた瞬間で私自身もちょっと興奮をしてしまいまして、今まで想像していなかった新しいインターネットを通じた広い世界に自分の得意が出品されるという、知らなかった世界と自分がつながる瞬間の興奮があらわれているのではないかと思っています。

○若者を見守るＳＮＳ

次に紹介するのが、シニアが若者を見守るＳＮＳ。先ほど阪本さんのお話の中にもありましたけれども、ネットで相互見守りのような話に通じるところがあるのではないかと思います。「若者メンタリングＳＮＳ」というものを研究室で開発いたしました。メンタリングというのは、経験が豊富な人が、経験が足りていない若い人などに対して後見人とか助言者としての役割を果たすことで、シニアの人たちが若い人をメンタリングしてくれると、とてもいいことが起きるのではないかと。「世代間交流ができるといいね」というのは皆さんやはりおっしゃると思うんですけれども、実際そういう場ってそんなにないというのが現実かと思います。若い人にとっても経験とか知識が不足していって、決断に対する不安があったりするかと思います。もしシニアの人がメンタリングすることができれば、自分の知識や経験を伝えられる。そういう意味で、若い人の力になれて、自分が活躍できて、自分自身の満足感にもつながるというメリットもあると思っています。

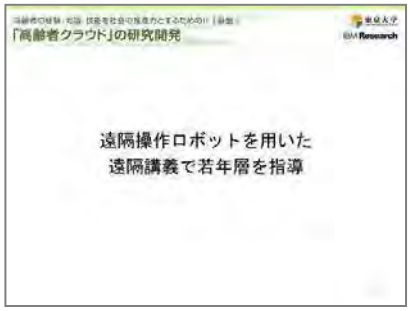
そこで開発したのが、若者の日常をコンテンツとしたソーシャルネットワークサービス。若者のスケジュール帳がオンラインで出ていて、それと同時に若者が達成したい目標も表示されていると。その達成状況をシニアの人たちが「いいね」とか「まずいね」というような、Ｆａｃｅｂｏｏｋでいう「いいね！」みたいなコメントをしたりとか、予定表を編集してしまったりとか、助言を書き込んだりというようなことをできるような仕組みを作りました。こちらも柏のシニアの方たちと一緒に行ったものです。

インターフェースは、画面はこんな感じになっていて、若者がログインすると左側に予定表があります。右側に達成したい目標のリストがあります。これに対してシニアの人は、例えばスケジュールの進捗状況に対する「いいね」や「まずいね」なんですけれども、スケジュールを選んで「いいね」をクリックする。もしくは、なかなか進んでいなかったら「まずいね」とか、遊んでばっかりだとこの予定はまずいんじゃないとか、そういうことができるようになっています。

予定表や達成目標を編集してしまうこともできます。例えば、学生さんがこの日空いているから実験やりなさいみたいなことを勝手に、若い人の予定の中へシニアが書き込んじゃうと。こちらは、より密なコミュニケーションとして、予定の中にコメントを書き込むと。若い人、学生さんの研究の話題に対して、いろいろなシニアからのコメントが並んでいるのですけれども、こういう形で助言を入力してコミュニケーションがとれる。こういう実験などを行っております。

○遠隔操作ロボットによる遠隔講義

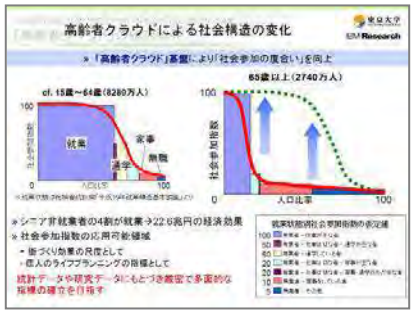
次に紹介したいのが、遠隔操作ロボットを使って、遠隔講義でシニアの方たちが若い人を指導するというものです。こちら、コンセプトビデオなんですけれども、アバタと呼ばれるロボットを活用して、自宅からこういう感じで遠隔地の教室にロボット講師として登場して教育をするという。こういうことができれば、旅行先でもいいですし、なかなか外出が不自由な方たちの場合はご自宅からｉＰａｄなどを簡単な操作でロボットを操作して、若い人とコミュニケーションを図るということができるようになるかと思っています。これが現実味を帯びてきている話として、一つは、この数年、特に欧米を中心として遠隔操作ロボットの価格が１桁下がって、ちょっと高めのパソコン並みの値段で――20～30 万円ぐらいなんですけれども、買えるようになってきたという現実がございます。



遠隔操作を実際にシニアの方たちに使ってもらうワークショップなども行いました。こ　　ちらはアメリカのシリコンバレーの「Ｄｏｕｂｌｅ」という会社が開発したロボットなのですけれども、１台 2,500 ドル。性能のよいラップトップ並みの価格。数百万円したロボットが、今では 20～30 万円で買えちゃうようになっています。どんなロボットかというと、ｉＰａｄに車輪をつけるアクセサリーというふうに考えてもらえればいいです。ｉＰａｄをお持ちの方は、このロボットを買うと、ｉＰａｄをロボットに差し込んで遠隔操作ができるようになります。重さがたった７キロなので、人にぶつかってもロボットのほうが負けるから、あまり怖くない。これを遠隔講義や遠隔コミュニケーションに活用できないかということで、いろいろなシニアコミュニティの方たちに使っていただいて操作感などの評価を行ってきております。こういう形で、ロボットも実際身近に使えるようになってきたというふうに、皆さんに知っていただけたらと思っています。そうすることで、ロボットを活用して、もっともっと自分の生活をこれから変えていくようなＩＣＴの活用の仕方というものをイメージしてもらえたらなと思っています。

○2020 年のシニア就労の姿

こういう高齢者クラウドで活用しているような情報技術、ロボット技術をうまく展開していくことで、例えば 2020 年ぐらいにはシニア就労の姿はこういう形に変わっていくのではないでしょうか。シニアの人たちがＩＣＴを活用して自分の経験・知識を若い人たちの現役世代の会社とかに提供していくような方法もあると思うんですけれども、それだけではなく、さらにいろいろな知識を生涯学習という形で取得しながら、１人が一つの仕事をやるというだけではなく、複数人のシニアのチームだったり、それだけではなくて若い人と協力をしていろいろな仕事をこなしていく。さらには、新興国の開発支援などという形で、その経験・知識を海外にも展開していくような形で、将来、日本の国の活性化、さらに世界への存在感を出していくということで、超高齢社会、健康長寿社会というものが日本の強みになっていくのではないでしょうか。



○シニア社会参加を支えるツールとしてのＩＣＴ

最後に、ちょっとした捕らぬタヌキの皮算用みたいなスライドなんですけれども、現在のシニアで就業していない方の４割が仮に就業して、若い人と同じくらいの生産性を持ったときにＧＤＰがどれくらい増えるかという試算をしましたが、すごい数値なんですけれども、22.6 兆円という、それぐらいの数字になってきます。そういう意味で、やはりシニアパワーというのはすごいので、超高齢社会というものを悲観的に問題として捉えるだけではなくて、その中に健康長寿でいられるという強みにもっと注目をして、社会に対してそのあふれる知識と元気なパワーを還元していくような意識を持っていただく。その中で有効なツールとしてのＩＣＴにも関心を持っていただけたらなと思っております。私からは以上です。ありがとうございました。

澤岡　檜山さん、どうもありがとうございました。すごく素敵な近未来が見えてきたというか、こんなテーマを企画させていただきながら、実は私が一番アナログな人間なもので、今のロボットのお話などを見ていますと、何か小さいころ見ていた夢の将来の 21 世紀の――もう 21 世紀ですけれども、21 世紀の何か未来というものが、また何かどきどきするようなものが見えてきたような。どうもありがとうございます。

牧さん、今、檜山さんの中にもありましたが、知らない世界に通じる興奮、これを味わうためにもシニアの方々がもっとＩＴに馴染んでいかなければいけない。そういったような視点でも様々な活動をされていらっしゃると思いますが、よろしくお願いいたします。

牧　牧でございます。今、本当に未来が見えるような、シニアを中心とした将来があるよという話を伺って、我々シニア当事者は、これはまあ、このままじゃ死ねないねと。もうちょっと我々も頑張ろうかというふうに思ったのではないかと思います。

私の話は、３人の中では一番年を食っているためかと思いますけれども、私自身がシニアなものですから、逆にシニアの目線で見た今の情報社会、あるいはこれから期待する情報社会はどういうものかというお話をさせていただこうと思っております。

私自身は、15 年前にフルタイムをリタイアし、すぐにパソコン２台を持って海外に飛んでいっちゃったんです。それは何でかというと、フルタイムを辞めていよいよ自由になったという喜び、自分の自由時間をいかに楽しむかという楽しみ方を求めていったのと、さはあれど社会あるいは日本を捨てたわけではないので、何かつながないと。社会から阻害されたシニアにはなりたくないなと。では、これを両立する方法はあるのかということで、私はパソコンを持ってインターネットに期待をかけていったのです。ただし、当時のインターネットは、今のような光通信があるわけではないんです。モデムなんですよ。懐かしい言葉ですよね。ですから、画像を転送するとか、そんな悠長なことはできない。ＹｏｕＴｕｂｅもないんですよ。ただ、コミュニケーションはできるんです。それを持ってチャレンジしてみようと思って、最初は２年の予定だったんですけれども、13 年間海外へいることになり、その後日本へ戻ってまいりました。

○高齢化と高度情報化社会

今日のお話は、シニアとＩＣＴ。御存じのようにシニアとＩＣＴ、二つの関係があると思います。一つは、ＩＣＴを使ってシニアライフをどう楽しむか、あるいはどうグレードアップしていくか、生きがいを作っていくかという問題と、それから、今、先生方がいろいろ開発してくださるＩＣＴの技術発展を待って、その恩恵を受けるというのは確かにありますよね。ただ、我々はその恩恵を享受するのを待つだけではなくて、もう積極的に使おうじゃないか、チャレンジしようじゃないか、そこに私はフォーカスを当ててきたわけでございます。

私どもは今、シニア社会におるわけですけれども、超高齢化は皆さんおっしゃるようにどんどん進みます。人生 90 歳時代といいますけれども、今日、午前中の話ではもう 100 歳時代になるかもしれないよと。一方、気がつくと、この日本は高度情報化であり、どんどん新しい研究が進んでいる。しかし、我々シニアから見ると、この二つの社会をどうやって結ぶのかというのが私自身の疑問でもあったわけです。我々自身がどんどん高齢化していく。世の中がどんどん高度情報化していく。では我々はどうやって育ってきたかといいますと、60 年前にテレビができて、大感動を受けましたよね。それから、インターネットができました。テレビができて 60 年でございます。インターネットができて 30 年ですけれども、初期のインターネットはごく一部のプロフェッショナルユースでございます。パソコンが本格的に使えるようになって 20 年、Ｗｉｎｄｏｗｓ９５ぐらいからだと思います。Ｆａｃｅｂｏｏｋは７年。ｉＰａｄ、今私が使っていますｉＰａｄは４年。我々、こういう歴史的な情報技術との接点というのを幾つか経験してきたわけですけれども、ものすごく速く進んでいるので、放っておくとどうなるか。デジタルデバイデッドシニアですよね。使いこなせないんです。これでは、やっぱり社会の潮流に乗れないですよね。でも、これは止められないんです。待ってくれというわけにはいかない。

○100 歳からはじめるＦａｃｅｂｏｏｋ

そこで私は、日本に戻ってきた直後に、たまたまのことですけれども、日野原重明先生という 100 歳の先生に出会うチャンスがありまして、ここから実は 100 歳の人が始めるＦａｃｅｂｏｏｋとのおつき合いが始まったわけです。この日野原先生は今 102 歳で、今でも講演しておられますけれども、要は、日野原先生とお目にかかったときに先生は何を期待されていたか。世代を超えて、地域を超えて新しいきずなはできないかな、と。年とったら何か新しいことをみんな始めていかないと刺激にならないよね、と。新しいことを始める、新しい生きがいを作るにはどうしたらいいか。シニアの力を社会に還元して、それを世界に持っていくにはどうしたらいいか。あの先生はお医者さんですから、予防医学は非常に専門の方で、御自身が検体として長寿を確認されておるわけです。予防医学。そして、健やかな長寿社会が結果としてできるよねと。ただ、これをやる上で、今までのやり方ではどうも限界があります。どうも聞いたところによると、このＳＮＳというのが世の中にあるよと。それで、

「ＳＮＳというのは何ですか」というのが先生の御質問だったんです。先生は、「中東で民主化運動が起きたときに大勢の人が一斉に蜂起した、もとはＳＮＳであったですよね」と。「地震が北陸で起きたときに通信網が途絶えたけれども、最後に残ったのはインターネットの通信ですよね。我々シニアの世界、そういうものが使えないか」と。そのときに、「Ｆａｃｅｂｏｏｋというのがあります。ＳＮＳというのはいろいろな種類があり、シニアが使うというのは大変なことなので、私どもはＦａｃｅｂｏｏｋを使います」と申し上げましたところ、１週間後、先生のほうから、「私、Ｆａｃｅｂｏｏｋに出たい」とお話がございました。「毎朝出て、私の言葉をみんなに伝えたい。」それが一昨年の３月でございまして、そこからいわゆるＦａｃｅｂｏｏｋの構築が始まったわけですが、先生のところには「新老人の会」という全国１万 2,000 人、全国に 45 支部ある、そういう会が現存にあるわけです。

先生の定義は、シニアというのは 75 歳以上であり、それ以外はシニアじゃないんだと。60 歳から 75 歳はジュニアだというわけですね。60 歳以下はもうサポート会員だと。というメンバーが集まって、全国に 45 支部で１万 2,000 人。先生の講演活動とか、いろいろな地区ではいろいろな文化活動も行います。さあ、そこに先生がやりたいとおっしゃるわけですけれども、75 というと、会員は、その新老人の会の年齢分布で見ますと 75 はここにあるんです。私が今この辺におるんですよね。77 で、来月 78。おっとどっこい、私よりも年上の人がこんなにおられる社会です。最高齢は 109 歳かな。日野原先生が一番年寄りじゃないんですよ。

こういう社会に、新老人の会をつくられた日野原先生は、要するにＳＮＳをやりたいと。考えてみると、これは大変なことだったわけです。「はい、やりましょう」とは言ったものの、前例がないんです。平均年齢 71 歳、全国１万 2,000 人の組織の中で「どうやってＳＮＳをやるの？」、ほとんどのメンバーは、「何、ＳＮＳって？」となりますよね。ＳＯＳは知っているけれども、ＳＮＳはわからないと。そういうことでものすごいインパクトがまず周辺に起きたわけです。Ｆａｃｅｂｏｏｋというのは、御存じのようにアメリカの大学でハーバードの学生が学生仲間の交流のために始めたもので、何でシニアの 71 歳が始めるんだよって。何か狂ったんじゃないのかって。

Ｆａｃｅｂｏｏｋ、私も使っていましたから、そんなに怖いとは思わなかったんですが、団体で使おうとすると、このグループ、これは大変なことなんですね。私自身が使っているのは、私のリスクでいいんです。一番私が心配したのは、安心・安全のＳＮＳというのは一体どうやって作るんだと。若い人たちはどんどん自分で、シニアはそうはいかないんです。それから、シニアのＩＴのレベルというのは、申し訳ないですけれども年によっても全部違うんですね。特に 70 を超えたら、ほとんど若いころはパソコンも使ったことがない。要するに、そういう方でございます。そこで我々は、組織の中にＳｍａｒｔ　Ｓｅｎｉｏｒ　Ａｓｓｏｃｉａｔｉｏｎ、すなわち、これは何かサポートするグループがないとできないということで、みんなでスマートシニアになろうよという掛け声のもとにこういう組織を作って、ここにＦａｃｅｂｏｏｋの導入を試みました。

２か月かけてインフラを整備しました。それで、そこに先生が毎朝こういう言葉とともに、「おはようございます。日野原重明です。今日の言葉」、その解説を載せて、こういうページを毎朝一番に上げるわけでございます。いわゆる、先生はいろいろなところで講演されましたけれども、１回講演されると 1,500 人、2,000 人は入るわけですが、ここの反応は桁が違うんです。こういう言葉を上げると、「いいね！」ボタンでも何千人という方が「いいね！」を押す。見ている人でも何万人がこれを見るわけですね。そういうふうに、実はものすごい反響が違ってまいります。

我々、ものすごく心配したことの一つに、シニアのこういうＦａｃｅｂｏｏｋが世の中に本当に受け入れられるのかどうかわからなかったわけです。このＦａｃｅｂｏｏｋ、今日の一言、誰が見ているんだということでずっとフォローしてまいりまして、実はこれ、横軸年齢で、男性、女性というふうに分かれるわけですけれども、この白っぽく見えるところはＦａｃｅｂｏｏｋのメンバーなんですよね。御存じのように、それは若い人が多くて、どんどん減るんです。ところが、我々シニアのＦａｃｅｂｏｏｋ、すなわち日野原先生を中心としたＦａｃｅｂｏｏｋのページは、ここにピークがあるんです。45～54 歳、ここが 35～40 ですね。ここが 55～60。ここにピークがあって、それでこういう人たちが反応してくれているんですね。それで、それはなぜだろうかと。どうもこの辺の人たちはそろそろ年の先を考えなければいけないんじゃないかというふうに――私はですよ、想像するんですけれども、女性のほうがちょっと多い。というのは、この辺、働き盛りですから、男性はどうしてもまだ見るチャンスが少ないのかもしれませんね。でも、こうして見ると、10 代から、Ｆａｃｅｂｏｏｋというのは 13 歳から上が見られるんですね。それから、この上、これは 85 オーバーですか、これだけの広い層の方がやっぱり興味を持って我々のＦａｃｅｂｏｏｋにアクセスしてくれている。これも驚きでした。

○シニアのＳＮＳ勉強会

こういうことが起きてくると、組織の中に何が起きるかといいますと、いろいろな、100 歳だって始められるんですから、ほかの人たちは言い訳がつかないわけですよね。これはもう、勉強会が始まりました。先生も勉強するんです。先生はキーボードをお打ちになったことがないから、音声で、言葉で、声で入れる練習をしていただきました。「おはようございます。日野原重明です、と入れてください」って、やったんです。認識しないんです。何で。先生の声が大き過ぎるのですよね。大き過ぎて音が割れちゃって、我々、昔風の人間というのはマイクロフォンに向かうと大声でしゃべる癖が。先生、もうちょっと普通にしゃべってくださいよと言ったら、100％認識して、「おはようございます。日野原重明です」と。先生もびっくりされた。「あっ、これはシニアに使えるね」と。

それから、勉強会を始めました。これは、この３人の方は 90 歳で、95 歳、93 歳、92 歳の方。毎回勉強に来られる。この方は、元タカラジェンヌだそうです。初舞台はと聞いたら、昭和 11 年。私が生まれた年なんですよ。私が生まれたときの宝塚の初舞台の方が、一生懸命こうやって勉強して楽しんでいる。我々、この３人の方を「90 シスターズ」と呼んでいますけれども、毎回ほとんど、今も勉強会に参加されている。

だんだん定着してきますと、いろいろな地区からいろいろな情報がここに載るようになります。この方は御殿場に住んでおられて、毎朝の今日の富士山を送ってこられます。「こんな花が咲いたよ」と。「乙女峠から富士山に向かったらこうです」と。御殿場から東京までｉＰａｄの勉強に来られてスタートした方です。

それから、今日ここにもおられますけれども、88 歳の男性の。毎朝世田谷のお散歩をされて、新しい発見をすぐ載せてくださいます。これもどんどん「いいね！」がばーっと出ます。

こちらの女性は、93 歳。山がお好きで、山登りをされています。山登りに行かれて、デジカメは今まで撮ったことがある。それをすぐにこうやってアップされるわけですよね。今日の山はこういう、これを見て、みんなが元気づけられるわけですよね。この方も、デジカメを撮ったけれども、今まで写真の処理方法がよくわからないから、写真をどうやって処理したらいいかって、一生懸命勉強されまして、こうやってぱっと、もうすぐに載っけてこられるわけです。

こういうふうに、私どもの期待以上に、場ができますといろいろなことができます。私どもの新老人の会というのは全国組織ですから、当然のことながらいろいろな地方の活動、これは福岡支部の活動、これは和歌山支部。こういうのがどんどんどんどんリアルタイムで載ってくるわけですね。そうすると、どこで何が起きているかということがもうすぐにわかるわけです。

それから、会員の中にはこういう絵の専門家がいて、絵を描かれている方がいて、生徒に教えてくださって、その習った生徒さんがすぐにそれを利用して自分でｉＰａｄで絵を描くわけです。お絵描きです。これをすぐ投稿するわけです。ですから、これを見たお孫さんが、私にもということで、また絵を描いた。要するに、連鎖反応的にいろいろなことができるようになりました。

こちらの女性は海外によく行かれる方で、海外旅行に行く前に観光情報を全部ｉＰａｄの中に入れていました。海外から送り方を私のところに相談に来て、それをヒントにいろいろやっていただいたのが、これは海外に行って、今日はこういうところに行ったよと。ｉＰａｄに入れていた観光情報を、現地で見ながら観光して、そして感動した写真をホテルに戻ってＷｉ－Ｆｉで送ってきてくれる。あの人、元気で旅しているねと。そうすると、これを見て私もそこに行ったわよと、対話が始まるわけですよね。

これは非常に私も驚いた。認知症の方が入ってきたんです。これ、その方が入ってきた最初のＦａｃｅｂｏｏｋ上の投稿なんです。「９年前にアルツハイマーになりました。目の前が真っ暗になりました。勤めも辞めました。でも、認知症は何もできなくなるんじゃないんですよ。皆さんそう言うけれども、何も、そうじゃないんですよ。私はＦａｃｅｂｏｏｋを始めました。方向感覚がないんです。新しい場所に１人で行くことができない。でも、助けてくれる人がいればどこにでも出かけるんです。問題は気力です。新しいことを覚えるのに人の何倍も時間をかけるけれども、必ずできるようになりますよ」、このメッセージを非常に重く我々は受けとめました。通常、我々が認知症になりたくない、なりたくないと思って忌避していますけれども、認知症の方が、認知症というものをもっと理解してくださいと。認知症の患者にも人格がありますよと。それを理解してください。できることとできないことがある。今日も、今朝もこの方はＦａｃｅｂｏｏｋ上にアップしてこられました。それをみんなが見て、励ましの言葉を差し上げるわけですね。ですから、健常人だけが楽しんでいるんじゃないんですね。

○ＳＮＳによるコミュニケーション

我々シニアの世界のコミュニケーションができ始めますと、いろいろなことがここで報道されます。したがいまして、今Ｆａｃｅｂｏｏｋ上で語られていることは日常思っていること、感動したこと、新しい経験したこと、困っていること、仲間を誘いたいこと。「今度こういうところへちょっと行くけれど、誰か一緒に行かない？」「お茶会やるけど、来ない？」などなど、要は情報発信が大事なんですね。受け身じゃなくて、自分から情報を発信する。そうすると、仲間からレスポンスがあるというのが、このＳＮＳなんですよね。メールでもできるじゃないかと。確かに、メールはほぼ１対１ですよね。不特定多数、あるいは仲間で、こういうたわいない、非常にたわいないのが話題なんです。でも、ここに健康な人、病を持っている人、お互いに情報を交換する。率直な気持ちで相談できる。これが感動ものです。したがいまして、Ｆａｃｅｂｏｏｋの新老人の会というのは全国で結ばれました。そして、北海道から沖縄まで、今や約 400 名がＦａｃｅｂｏｏｋを楽しんでいます。20 歳から 100 歳まで――102 歳ですかね、今。がん患者もおれば、認知症患者もおる。今までそういう人たちがリアルタイムでつながることができたでしょうか。

ですから、ＳＮＳ、ＦａｃｅｂｏｏｋとｉＰａｄ。ｉＰａｄを我々がお勧めしているのは、パソコンを使ったことがなくてもこのｉＰａｄなら指１本でいろいろ使えるということでお教えしているわけですけれども、要するに、シニアならではの新しい感動が出てきました。何で。懐かしい昔の友人に出会えた。私もその１人だと。もう現役時代、何十年も前に一緒に仕事をした仲間とＦａｃｅｂｏｏｋで、おおう、お前生きていたかというような感じですよね。趣味の活動が広がりました。私、こういうものをやっていると言ったら、同じような趣味を持っている人が、全国から連絡がありました。それから、離れて暮らす親の、要するに、施設に入る親にｉＰａｄを持って入ってもらいました。そうしたら、毎日孫とＳｋｙｐｅでテレビ電話をやる。あるいは、今日こんなことがあったよというと、これはデジカメがついていますから、カメラで撮ってすぐ留守宅に送るわけです。今、親子が離れて暮らす、施設に親を入れたけれどもお見舞いにはなかなか行けない。喜んだのは家族でした。本人も喜びました。それから、病気になって入院した人がやっぱりｉＰａｄを持って入りました。やっぱりこれで院外の友達と毎晩つながりました。全然孤独感がない。それを見ていた隣の隣のまた隣の病室の人がみんな集まってきて、「それ何？」というところから始まって、社交場になってしまったと。要するに、寂しい入院生活が毎日楽しくなった。海外との孫、毎晩長話している人がいます。カラオケをやっている人もいます。要は、孤独の生活から脱却して、誰かに見守られていると。情報を発信すると誰かが反応してくれる。要するに、見守られる。要するに、シニアというのはどうしても孤独になりやすいのが、これがなくなる。これはシニアライフとＩＣＴの有効性ですけれども、シニアになると体力が落ちますよね。これをＩＣＴがどれだけカバーできるかというのは、健康データを入れるとか、何かいろいろやれば役に立ちますから。だけど、積極的に体力が増強するわけではない。あとは、孤独・孤立への道、シニアになるとどうしても友達は減る。外出の機会は減る。人と話が少なくなる。家族との距離が。これは、ＩＣＴならではの効用ではないでしょうか。

それから、認知への道。皆さん、どうですか。物忘れが多くなっていませんか。僕なんか、書類などを探す時間が毎日増える一方ですよ。どこかにあるはずと。これをカバーしてもらっています。それから、活動強化への欲求。もっと趣味を広げたい。それから、もっといろいろなことを知りたい。知らないことがこの年になってもいっぱいある。もっと知りたい。知識欲というのは、やはりインターネットでいろいろな形で情報が即とれる。すごいＩＣＴを活用。

○シニアのＩＣＴへの入口

では、誰でもできるのかということなんですけれども、いろいろ、私もこの２年間の経験をやっていますと、やっぱりこういうのをやろうよと。二つのというか、一つの非常に一番大きなのは固定的先入観です。もう年だから。皆さんのケースは当てはまらないと思うんですけれどもね。それから、最新の情報機器なんてのは私はとても無理と言いますけれども、私に言わせると、最新の情報機器ほど使いやすいものはないんですよ。昔の情報機器は難しかったんです。それから、もう一つは、つまずく。出だしです、まず。何かやりたいと思うと、出だしでつまずく方が多い。それから、道半ばの挫折。ここを何とかクリアすれば、シニアは非常にＩＣＴにフレンドリーになる。それから、もう一つ、インターネットは怖い。そんなもんはやめなさいと。特に家族の脅かしが効いています。もう、こんな年で何を始めるの、というような。したがって、我々はそういう不安を取り除く。あるいは、困っている問題を個々に解決していく。そこに重点を置いているわけです。

我々がたくさんのＩＣＴを使ってもらいたいと思っているのは、どういう環境が欲しいかというと、やっぱり使って楽しいＩＣＴでないとシニアは使い切れません。続きません。ですから、年相応に楽しめるものの使い方をお教えしている。それは何か。日常生活に密着したアプリをいろいろ使ってもらっている。要は、一般的な知識で、ではＷｏｒｄを使いましょう、Ｅｘｃｅｌを使いましょうといっても、これはなかなか大変ですけれども、日常の生活でこんなのが生活に役立ちますよと。これは非常に皆さんがＩＣＴの効果を身近に感じる。それから、やっぱり取組のハードルが低いこと、挫折しないために大事なことは、

仲間との勉強というのが一番どうも大事ですね。孤独は――できる方は自分でやっていいんですけれども、得てして自己流というのはどこかで限界が出るケースが多くて、それで、やっぱり仲間がいるということが大事。それから、よりもっと大事なのがマイペースです。これは、人によって理解のスピードというのは特に年をとると違います。ですから、マイペースでやってください。いいんです。私は同じことを何回も教えます。同じことを何回も聞いてくださいと言います。やっぱりそれをやらないとだめ。それから、家族、友人と一緒に楽しんでいくと、これはすばらしい世界ができます。

○サポートと安心安全づくり

去年私の研究所で、60 歳以上のシニアでＥメールをやっている仲間の人たちにアンケートを配ったんですね。あなたは自分の将来のＩＴにどう対応できるか。「充分対応出来ると思う」という人は 20%しかいないんです。対応できるかどうかわからない、あるいはシニア向けのサポートシステムがあれば何とかいけそうであると。もう諦めているという人もいるわけですよね。大事なのはここなんですね。やはり何かのサポートがないと、なかなか十分できる人は２割。この２割の方は放っておいてもやります。でも、やっぱりこういうことのために我々は何か考えなければいけない。スマートシニア、スマートというのは「聡明な」とか「賢い」とかそういう意味なんですけれども、そういうものを使った、いわゆる知的にも健康なシニアライフ。体だけではなくて。そうすると、より楽しい高齢化社会に対応できるシニアになると思いますが、このＩＣＴだけが独立して別のものだと思うとだめなんですね。やっぱりリアルの社会に立脚したデジタル社会というものを作っていかないと、あくまで現実はリアルの社会。現実です。

それから、安心・安全のプラットフォームというものを作っていかなければいけない。楽しく学べる学習環境、気軽に聞けるサポート。ここに若手の人の支援が必要なんです。

それから、何はともあれシニアがシニアを支えるというのはどうも一番効果があるようです。やっぱりお互いの気持ちがわかりますから。それで、ただし、シニアに優しい情報機器とか機材がそれでは十分あるか。申し訳ないですけれども、今、先生のところで一生懸命開発していただいていますが、まだまだ少ない。情報社会の中にシニアがどういうふうに、関わるか。「Ｅ－Ｓｅｎｉｏｒになろう」、総務省がやっている「スマートプラチナ社会」、「アクティブシニア」。スマートシニアのいろいろな言葉がございます。要はやはり、情報技術を使ってメンタリーに賢いシニアになっていこうと。

今、私は後期高齢者ですけれども、私自身、この名前が大嫌いでございまして、私は今、こっち――「好機幸齢者」でいこうかと。絶好の機会が来たと。やっぱり自分の人生を楽しむ。幸せな年だと。もうやるべき世の中に対するオブリゲーションは基本的に終わったと。あとは自分のための人生だと。まさに「好機幸齢者」で私はいきたいと思っております。

最後に、こういうことをやろうと思ったときに、私としてはやはりインフラ環境ですけれども、今はこれ、ネットにつなごうとするとすごいお金がかかるんですよね。月々契約で。4,000 円、5,000 円というのが。これ、結構負担だという仲間が多いんですね。それで、今、私としては、何でシニア割引がないんだろうかと。シニアは無償のインターネットというのはないんだろうかと。今、電車でもあるじゃないですか、シニア割引というのは。シニア割引だと皆さん出歩くでしょう、やっぱり。無料パスだったらどんどん行く。やっぱりこういうものが使える、シニアＷｉ－Ｆｉ。いいですよ、情報量は少し制限があっても。そんなにたくさん使いませんから。月間２ギガぐらいの通話料だけれども非常に安いというものがなぜない。そういう発想がどこかからあっていっておかしくないのではないか。本当にシニアがＩＣＴを使ってほしい世の中を作りたければですね。

それから、リテラシー向上です。さはあれど、ＩＴを勉強しましょうよと。自ら。ところが、これの問題は、私もいろいろな場所でこうやるんですけれども、場所がないんですよね、勉強の場所がなかなか。教育施設がやっぱりない。みんな手作りです、ほとんど今。それから、指導者はどういう指導者がいるのか。横の連絡がなかなか。しかし、何はともあれ、仲間なんですよ。仲間をどうやって見つけるかということがどうも大事だと。世の中は、今は若手の世界も労働力不足で彼らも大変な世界になってきています。我々がそういうところに迷惑をかけないでやるためには、我々シニアが自分自身の問題として、ここに自分自身の活路を見つけていきながらやっていけば、先ほどＧＤＰがこれだけ上がるよということにもつながるのではないかと思っておりまして、私自身がシニアであるものですから、こういうふうにも思いながらやっております。もし、もっといいアイデアがあるよということであれば、是非この後のディスカッションでお願いしたいと。

澤岡　牧さん、どうもありがとうございました。

期せずして、先ほどの新老人の会の定義でいきますと、牧さんはシニア、阪本さんはようやくサポート

からジュニアになりたてのジュニア、それから檜山さんと私はもう下のほうのサポートメンバーということで、こういった３者がそろって、それぞれの立場からこのテーマについてお話をいただきました。

では、後半の部に入らせていただきたいと思います。

まず、これだけ切り口も、それから世代も違う３人が今日はパネリストとして集っておりますので、まずそれぞれの御報告、話題提起をそれぞれ聞かれまして、感じられたこと、またちょっとこういうことを質問してみたいということがございましたら。阪本さんからまずお二方にいかがでしょうか。

阪本　では、ジュニアから。60 代のジュニアですから。

お二方のお話も大変面白く聞かせていただきました。2012 年に政府が高齢社会対策大綱を、支えられる高齢者から支える高齢者へという大きなものに転換をして、それが今日のお二方のお話は本当にそれがリアルになってきたといいますか、今の高齢社会対策大綱のことは、御説ごもっともなのだけれども、なかなか現実にはならないねという話をされたんですけれども、今日のお話は本当にそれが現実になろうとしているという、お話をお二方から聞くことができたのかなと、そんなような気がいたします。

○受益者から発信、支援者へ

まさにシニア、この年代ならではとか、だからできるというお話がお二方からあったと思うんですけれども、とりわけ牧さんから情報発信という、今まで高齢者というのは、弱者、受益者として語られることがすごく多かったわけですね。だから皆保険制度もそうなんですけれども、常に語られてきたのだけれども、牧さんがお話になったのは情報を発信しようよということをお話しされた。発信者になる。発信者の側になるということがすごく大きな転換なのだと思うんですね。それがシニアの牧さんからお話しされたということ。しかも日野原先生は 100 歳でそれをおやりになっている。日野原先生は本当に 100 歳でステージで立ちでお話しされるという、驚くことをされていますけれども、本当にＳＮＳもされるんだなって、すごいなって、改めて思いました。発信をされるということがすごく大きいなということを、一つの大きなポイントとして感じました。

それから、檜山先生からは、さらにそれを進めて、今実験としておやりになっているわけですけれども、それを使って、発信だけではなくて若者を支えようよという。若者を支える方法って何かないだろうかということを実際に始められているということが、今後すごく大きいなということがあって、私たちは大変わくわくする取組だなというふうに思ったんですね。これが本当に広がっていくといいなと思ったんですけれども、檜山先生に、すごく瑣末なことを聞いていいですか。若者のスケジュール帳の話がありましたね。それを皆さんがアドバイスするということですけれども、たくさんの人数の人が、７～８人がそろって、これはちょっと違う、このスケジュールは違うんじゃないかとか、若者にとってそれはちょっと勘弁してよということはないんですか。

檜山　あのカレンダーベースのＳＮＳにはその辺を考慮した仕掛けが入っておりまして、一番最初は「いいね」か「まずいね」しかできないんですよ。その簡単なやりとりの中で、このシニアの人は私を一生懸命見守ってくれているなというふうに学生さんが感じたら、次は、その信頼度を１個上げてスケジュールをいじれるようになってくると。さらに信頼度が上がると、直接的にメッセージを送り合ってコミュニケーションができる。そういう、何か適度な距離感を作ることが、若い人とシニアの間の交流では、最初の段階では必要かなと。学生さんのアイデアなんですけれども。

阪本　そうですか。すばらしいですね。いろいろなコミュニケーションに応用できそうですよね。多分コミュニケーションって相手がわからないから、本当にこの人とコミュニケーションをしていいのか、ざっくばらんな会話をしていいのかわからないじゃないですか。でも、今みたいなステップがちゃんとあれば、ああ、この人とは次の段階に行けるというふうになるから、かなり秀逸なステップかもしれないですね。

澤岡　そうですか。信頼度。相手からも逆評価をされるという。頑張る何かにもなりますしね。

檜山　そうですね。参加したシニアの方のコメントだと、若い人から信頼度を上げてもらえるように一生懸命「いいね」とかを、ちょっと媚びているかもしれないかなみたいな感想を交えながら話してくださったことがありました。

澤岡　その「いいね」というところでちょっと関連なんですが、今度は牧さん、Ｆａｃｅｂｏｏｋをシニアの方々の皆さんに普及させているということなのですが、「いいね！」というのはやっぱりうれしいものなんですか、シニアの方々というのは。

牧　「いいね！」の押し方は難しいんですよね。どういうふうなときに押すか。でも、例えば、一番いいのは共感したとか同感したとかいうのは「いいね！」でいいんですけれども、訃報があっても「いいね！」を押さなきゃいかんケースもありますし、何か難しいんですけれども、やっぱり反応を見ていてもらえる、反応が来るということ、これは最高にうれしいことですよね。何か情報を発信したけれども、誰も何とも、うんともすんとも言ってこないというのはやっぱり寂しいことなので、できるだけ反応してあげて、それでコメントを書いてくれると本当に心がつながる。ですよね。自分の人生経験もそうですけれども、他人の人生経験がこの年になると役立って、自分だけが困っているんじゃない、寂しい思いをしているんじゃないという、いわゆる共通感、共鳴感というのがある。これが大事だと思いますので、やっぱり「いいね！」は、「いいね！」ですね。

澤岡　ありがとうございます。

　その牧さんからお二方に対して何かお聞きになりたいことは。

○連携という課題への取組

牧　一つ、阪本先生に。今、我々がいろいろな活動をやっていて、似たような活動というのがあちこちたくさんあるんです。パソコンを教えていますとか、シニアのこういう活動のサポート。問題は、これが孤立しているというか、つながらないというか、それぞれがある限界で、活動の限界のままで、規模がそのままいかないとか、内容がとか、こういう事例が多いものですから、何かこれをつなげる方法はないだろうかと。理念があって、みんな一緒なんですよ。聞いてみると。ところが、地域、事情が違いますから一律にはいかないのでしょうけれども、もうちょっとつながっていくのではないかと思うんですが、何かアイデアはないでしょうかね、先生。

阪本　そうですね。本当、私もそれはあればいいなというふうに思います。個人個人がまさに独居老人だったりして、孤立をしているところに、今まさに牧さんがいろいろと一緒にやろうよと呼びかけをされているという、それと同じ構図が今度はその上のレイヤーでやっぱりあるということですよね。ＮＰＯ同士が、ある種孤立とは言わないけれども、何かある限界を皆さん抱えているというところがあったり、それが今度はつながらないかということだと思うんですね。内閣府に協力をしてバックアップをしている高連協は、まさに高齢社会ＮＧＯ連携協議会ですから、もともとＮＧＯが連携しましょうよという趣旨のところなので、そのことを実現させようというのがまさに高連協なのですけれど。ただ、それはＮＧＯ同士ですので、もう少し草の根の、しかもネット上でそれができると私はすごくいいなというふうに思います。今回のパネリストの打ち合わせのときに内閣府の方とお会いしたので、内閣府のバックアップでやりましょうよというような話をさせていただいたのですけれども、何かそういうネットでつながっていく、草の根でやっているところがつながっていく、連携した動きといいますか、それは確かに必要だと思いますし、さっき檜山先生とも何か連携してやりましょうかという話をしたのですけれども、ひょっとしたら私どもの研究所で何かお役に立つことがあれば、何かそういうゆるやかな連携、それは何か今後作っていってもいいかもしれないですね。

牧　ひとつよろしくお願いします。

澤岡　でも、その見地からしますと、今、柏で檜山先生がいろいろと取組をされていらっしゃるとおっしゃっていましたが、地域ニーズをいろいろ汲み上げて、その能力を持っているシニアの方に発信していくという形を考えますと、その草の根レベルのところをどうつないでいくかという部分も、恐らく先ほどおっしゃられた高齢者クラウドの中に入っていらっしゃるのかなと思うんですが。

檜山　高齢者就労の事業とかも各地域に小さいものがたくさんあるのですけれども、そこがなかなかつながらないので、単純な１個の仕事の、仕事の種類も広がらないし、全体としての規模も大きくならないというのが同じような課題としてあると思っています。そこをつなげるためのＩＣＴの技術開発も必要だと思って、それが高齢者クラウドの研究の役割でもあると思っています。

　シニアＩＣＴのコミュニティ間のつながりをいかに作るかに関してなんですけれども、その一個一個の集まりの中に若い人も混ざっていけたらいいのではないかなと。その若い人がハブとなって全国を飛び回って何かつないでくれると、もっともっと広がりが生まれるかもしれないなと、そういうふうに思いました。

阪本　それはすごくいいアイデアじゃないですかね。若い人がそのつなぐ役割になるというのは。若い人は、ネットの横でのつながりという意味では、今ある種、我々の想像の域を超えるぐらい速いスピードでつながっていきますから、若い人が連携のハブになっていくというのはものすごくいいアイデアで、何か

できるといいですね。

○シニアと若手の共同ワーク

澤岡　そうですね。高齢社会ということをディスカッションしますと、何か高齢者が高齢者を支えるということが今は割と大きなメーンフレームになっていまして、若い人とどう一緒にシェアしていくかという部分は、そして若い人たちができること、シニアができることという部分で、やはり若い方が入ると何か発言が、視点が変わってくるなというのは今気づいたのですが、牧先生、何かおっしゃりたいことがあるような。

牧　我々がやっていて、一番シニアと若手と共同ワークができるのは、何かのイベントですね。何かイベントを企画するんです。そうすると、発想はどっちが、若い人が発想しても年寄りが発想してもいいのですけれども、集客する人、企画する人、場所を探す人、仲間を呼ぶ人、いろいろな役割が必要なんですよ。そうすると、やっぱりこれがうまくいくかいかないかということで、一つの共通の理念の下にみんなが持ち寄るんですよね。それで、やっぱりみんな楽しいんです。ですから、あまり格式張ってやるよりも、何でもいいんだと思いますよね。何かあるたびにそういうのをやるというふうなことも一つの手じゃないかなと私は思っている。それで、イベントで集めるのも、Ｆａｃｅｂｏｏｋは簡単なんですよ。こういうのをやるよと言うと、参加ボタンを押せばいいんですね。そうすると、どういう人が参加して、あと足りないよ、定員まだこれだけあるよと言うと、じゃあ行くか、とかですね。やっぱりそういう、早くレスポンスしていって、何となくあおられてもいいんですよ。そういう仲間に入ったということが大事ではないかなというふうに思います。

澤岡　やはりそれはＩＣＴだろうが何だろうが、楽しいところには人が寄り集まってくるというのはどこの時代にも共通して言えることなのかなと思います。

　では、檜山さん、お若い立場から、お２人の先輩のお話を聞かれまして、何か気づかれたことであったり、御質問がありましたらお願いします。

○シニアへ向けての新しいＳＮＳ

檜山　牧さんのお話の中で、シニア割、私もあったらいいんじゃないかとそう思います。そこでちょっと思いついたというか、頭の中に浮かんだのが、Ｇｏｏｇｌｅの検索サービスとか地図のサービスがございますよね。それと、Ｆａｃｅｂｏｏｋというのもございますよね。そういうサービスって、全部無料で一般の人たちは使えているわけですよ。だけれども、ＧｏｏｇｌｅとかＦａｃｅｂｏｏｋって非常にたくさんのお金を集めている。もう勢いのある企業になっていっている。それは何でなんでしょうと。そういう末端のサービスでお金を儲けようと考えているわけではなくて、そこを利用する人たちがたくさんいる。それこそが価値だということでいろいろな企業からお金を集めることができている。そういう意味で、日本の通信会社さんとか総務省さんもちょっと見方を変えて、シニアは通信料は無料にします、だけれども、Ｆａｃｅｂｏｏｋとか――Ｆａｃｅｂｏｏｋよりは、日本でそういうシニアのための新しいＳＮＳを展開する日本企業が出てくると一番いいのですけれども、その上で交流されて発信される情報は、シニアのための見守りサービスとか健康づくりサービス、食事のサービスとか就労のサービス、そういうものに活用させてもらいますよという、そういうようなトレードオフをすると。企業の人たちは、それを使っていろいろなビジネスの相手からお金を集める。そんな仕組みがあると何かすごいことが起きるのではないかなと思いました。

澤岡　何か実現できそうですよね、マーケティングのお立場からも。

檜山　そうですね。マーケティングの情報として価値があるかもしれない。

阪本　なかなかそう簡単に……。わからないですが、昨日も社内で打ち合わせをしたばかりなのですけれども、ある年代が集まっているコミュニティサイトがあって、その中で掲示板を立てて、それは介護家族の悩みを語るという掲示板をやったんです。これが掲示板の中でも大ヒット。親の介護を語る掲示板なんですけれども、相当いろいろなのが来ましたね。その中では１人で抱え込まない。やっぱりいろいろな人たちと、外の力を借りながらということがたくさんあって、すごく参考になったんです。例えばその中で私が一つ、ああ、こういうのもあるんだと思ったのは、介護するときにはフレグランスをうまく使いましょうというのがあって、へぇーと思いましたね。フレグランスを使うと介護自体がすごい変わってくるというね。ああ、こういう手もあったかと驚かされました。だから、そういう知恵が集まってくるわけですよね。今おっしゃったＧｏｏｇｌｅでも何でも、場をうまくセットしたところが非常によかったと思うので、だからそういうのがうまくできてくると、まさに今、檜山さんがおっしゃったようなことが現実味を帯びてくるといいますか、そんなような気がしますね。

澤岡　ありがとうございます。では、残りのお時間を使って、会場とのディスカッションに入らせていただきたいと思います。

まずは、牧さんと同様にシニアにＩＣＴ普及でかなり活動されている、ＩＤＮ、自立化支援ネットワークの代表の生部さんが来ていらっしゃいます。実は私、アナログな人間と、ロボット、機械バリバリの檜山さんとの出会いを作ってくださったのもこの生部さんだったりもしますので、今日はまず生部さんに口火切りというか、何かコメントであったり、御質問がありましたらお願いいたします。

○シニアのＩＣＴスキル向上

生部　御指名いただきました生部でございます。私、ＮＰＯ自立化支援ネットワークという、ＮＰＯなんですけれども、十数年続いている団体でございます。今日は大変貴重なお話、お三方、ありがとうございました。

それで、今日私が感じたこと、日ごろ感じたことなのですけれども、今日は特に多世代との交流ということなのですが、多世代の交流でＩＣＴを使ってというのを考えた場合に、やっぱりシニアのほうがＩＣＴをある程度使えないと始まらないということがあって、私ども、シニア情報生活アドバイザーを養成するということを活動の一つとしてやっております。これは、当初パソコン、インターネット、メールについていろいろと講座等で御指導するということをやっておりましたけれども、さっき牧さんからお話がありました高齢になっていくというのもそうです。このＩＣＴの世界は広がる一方で、教えて差し上げる内容がどんどん増えていくんですね。そういうことで、シニア情報生活アドバイザー、私どもの団体で三百数十名養成した実績がございます。この方々がシニアの方にＩＣＴの使い方をアドバイスすると言っておりますけれども、たまたまそちらに先週の土曜日まで一緒に講座をやっていたアドバイザーに、これからおなりになる方もいらっしゃいますけれども、そんな活動しておりまして、一番感じますことは、さっき牧さんのお話にもあったかと思うんですけれども、シニアの方に何を教えるか。パソコンの勉強をしなさいと言っても全然だめなんですね。シニアの方はもうそれぞれ御事情、御希望、興味がおありなので、やっぱりシニアの方が何を今欲しがっておられるかということを的確に捉えて、何回質問されても嫌がらないでお答えをしてわかっていただくと。ですから、何に興味を持っておられるかということと、何回でもという、この二つのキーワードが一番大事かなと思っております。

それで、一つの例なんですけれども、私どもの仲間に、私と同じぐらいの年齢で習志野に住んでいる人がいまして、息子さんが２人いて、１人は東京都、１人はサンフランシスコに住んでおります。さっき、同居、近居っていうお話、阪本さんからありましたけれども、最近遠く離れた遠居といっていいんでしょうか、これでＩＣＴを使えるという可能性が非常に出てきたと思います。サンフランシスコに息子さんが行くときに、ｉＰａｄｍｉｎｉを、「親父、これ置いていくぞ」と言って、使い方を簡単に教えてくれたんですね。サンフランシスコに行かれまして、お孫さんとのテレビ会議なんですけれども、ＦａｃｅＴｉｍｅをやって、サンフランシスコにいるお孫さん、息子さんの顔が常に見られるということをやっておられる、そんなことを聞きまして、ｉＰａｄｍｉｎｉといえば小さいですよね。これって、大型のテレビ、リビングのテレビにつなぐ方法があるんですよって一言いうと、全然今まで知らなかった、興味を示さなかったことなのにヨドバシカメラに行ってコードを買ってきて、早速つないで、「生部さん、見られるようになったよ」って、こんな感じなんですね。

ということで、やっぱりシニアがスキルを持ってもらいたい、そのためには助けてあげないといけない局面がたくさんあると思います。そういうことで、私どももいろいろ努力しておりますけれども、牧さんは大変御経験おありのようなのですので、そこら辺のシニアに対する御指導の仕方といいますか、アドバイスの仕方等、もうちょっとお話を伺えたらと思います。よろしくお願いします。

牧　すばらしい、そういう指導員を三百何人お持ちということ自体がうらやましいのですけれども、私は今三つ教室を持っていますけれども、そこには初めての方もかなり来ます。そのときに私がやることは、その人の生活ぶりを聞きます。まず、１人暮らしなのか、経験はどうなのか、趣味は何なのか、あるいは日常どういうことが困っているのかとか。それに合わせて、ああ、この人はこういう人なんだなということで勉強のとっかかりをつかんで、そして、その人に合ったような、例えばこういう使い方があると。ですから、一律カリキュラムでは実はないんですよ。そのときに困るのは、とにかくいろいろな質問が来るものですから、全てに答えられるわけではないので、それはそれとして、もしいろいろなサポーターの、「この分野だったらこの人」と、お持ちでしたら、お互いにそういう交流をするというのも一つの手かと思いますね。

この間もあるところに呼ばれて、いわゆるこれから先生をやりたいという方に、どういう心構えをしたらいいかを教えてくれという話がございまして、ちょっとお邪魔したのですけれども、やっぱり教え方は

技術を教えるのではなくて生活の生き方を、結局ｉＰａｄがいいとか何かじゃなくて、生き方の中にｉＰａｄというものがすーっと入るような。私はそのようにやっておりますけれども、ほかにもいろいろやり方はあると思いますけれども。特にタブレットはパソコンと違って、朝一番、私もそうです。朝起きると、「今日の天気は」と聞くと、「今日は最高気温何度よ」と言う。夜寝るときに「明日の朝６時半に起こしてね」と言うと、目覚ましにもなるわけですよね。それから、Ｓｉｒｉというやつを聞いて、ちょっとわからないことがあって、ぱぱっと入れると答えてくれるんです。秘書が要らないんですよ。女房に聞くと怒られちゃうんですけれども、全然Ｓｉｒｉは怒らないんですよね。ですから、やっぱりそういう意味で楽しく使えるんだと。

それから、音声認識と同時に読み上げというのがありましたけれども、これで驚いたのは、喉頭がんで声帯がなくなった方、会議でもう発言ができないと諦めていた方が、ｉＰａｄを使って会議で発言したいことを自分で記事にして読み上げをするんですよ。その方は仕事をしているのですけれども、もう自分は会議は黙っていなきゃいけないと、声が出ないので。そうしたら、会議に参加できるようになった。非常に生きざまが変わりましたね。ですから、ハンディキャップを持っている方、何かいろいろ困っている方、その方にｉＰａｄの使い方を探してあげる。これ、教科書に書いていないのですけれども、試してみると結構いろいろなことができて、これがシニア。やっぱりシニアの気持ちがわかるから、私も一生懸命考えて、私自身がまさかそんなことでｉＰａｄが役立とうなんていうのは夢にも思わなかったのですけれども、現実そういう方がおられました。

生部　ありがとうございます。

澤岡　では、一番前の方、お願いいたします。

（会場Ａ）　今 72 歳ですのでジュニアということなのですけれども、今のお話の中で、私、フィンランドに学生を連れて視察に行きましたときに、各地域の公民館みたいなところにパソコンが置いてありまして、そこで、地域の高校生が地域のお年寄りに使い方を教えているんですね、各地域で。今フィンランドは、何か行政のいろいろな手続を全部パソコンでやるというふうな世の中に変えていくらしいので、それも含めて高齢者の、本当にもうこんなになったおばあちゃんに若い高校生が一生懸命教えているのを見てとっても感動したことがあるのですけれども、そういったことを是非、檜山先生にも。大学生とか高校生の方がそういった形で地域の貢献をできれば、若い人たちも何か自信につながるのではないかなということを感じました。

それと、もう一つ牧先生にお願いしたいのですけれども、今、日本は 65 歳以上を高齢者と呼んでいますよね。1964 年のときには 65 歳以上が高齢者でよかったのですけれども、今ややはり 10%といったら 75 歳以上ですので、その世論を変えるために、65 歳以上はもう高齢者じゃないんだよということをどんどん発信していただいて、世論そのものを変えていただきたいというふうに感じますので、どうぞよろしくお願いいたします。

澤岡　ありがとうございます。檜山さん、そういったことは柏では今、若い力をどのように考えていらっしゃいますか？

檜山　私はまだ直接はコミットはしていないのですけれども、高齢社会総合研究機構のほうでは、子育てである程度子供が手を離れた主婦層の人がそういう役割を担えるのではないかということで、地域でのシニア活動の拠点にそういう人が入り込んで、その活動をバックアップしてくれるようなことを実際に進め始めております。もちろん、中高生とか、そういう人たちのボランティア活動をやっている実績として、シニアコミュニティの集まる場所、樋口先生のお話でいうとクールシェアとか、そういうような地域の中のシニアが集まる拠点の中に入ってその活動をサポートすることを一生懸命やっています。このようなことを何か仕組みとして作っていけたらいいなというふうに思いました。

澤岡　ありがとうございます。

シニア、高齢者という二つ目のコメントでございますが、牧さん、それからあと阪本さんは、これからやはりある意味価値観を今作っていらっしゃるようなお立場でお仕事をされていらっしゃると思うんですが、お二方から何かコメントはございますか。

○100 歳時代の人生設計

牧　あのね、本当なんですよ。私、会社に入るときは定年 55 で、人生 65 だから、10 年、お前定年後というような話。定年を 60 過ぎて考えてみたら、そのときは 80 まで生きそうだから、十何年どう生きようか

と。今 77 で、余命表というのを見て、あと 10 年ちょっとあるんですよね。ということは、やっぱり 90 近くまでひょっとするといっちゃうかも。そうすると、新しい目標をつくらなきゃいかんですよね。そうすると、実際生きられるかどうかの保証はないんですけれども、日野原先生を見ていたら、100 歳。もう、すごいなと思うんだけれども、こういう人は増えるなと思いますね、これから。ですから、我々も 100 歳時代はある意味では意識して人生設計を、本当に根本的に変えるぐらいの。さっき海外の話がございましたけれども、私も海外にずっと出ていて、海外の人の生き方というのと日本人の生き方というのは違うんですよね。海外は基本的に自立なんです。基本的に。自立するために何をしたらいいかから始まるんです。日本はどちらかというと守ってもらうほうから始まるんですね。誰かに。依存型なんだと。やっぱり我々の考え方も根本的に変えていけば、本当に長生きしちゃうと。しかし、体だけが丈夫でも楽しくないから、みんなで頭脳を刺激し合おうじゃないかというのがこの私どものスマートシニアをやろうという発想なので、是非皆さんもそういうことで、地域で、あるいは仲間でできるところから始めていただければと思っております。

○シニアの認識と新たな呼称

阪本　私ども広告会社なので、高齢化は大きなテーマというか、前身のエルダービジネス推進室をつくったときからの大きなテーマなんですね。いろいろと調べてみたのですけれども、わかってきたのは、昔は「お年寄り」という言葉があって、「お年寄り」はどうだろうねというのがあって、それで「シルバー」という言葉になったんですね。「シルバー」も使っているうちにだんだん嫌になってきて、それで今「シニア」になっているわけですよ。ですから、結局、高齢を意味する言葉というのはやっぱりだめなんですよね。さっきいみじくも後期高齢者とおっしゃって、あれも後期高齢者医療制度があったときにデモが起こって、そのときにはもちろんお金の負担についてを直接的にはデモをしているのだけれども、それ以上に後期高齢者とは何事だと。高齢者を何だと思っているのみたいなね。そこだと思うんですね。65 歳から高齢者になっていますけれども、65 歳の人に「何歳から高齢者ですか」と聞くと、「75 歳」とかね。ずっと上の向こうに、自分の向こう側にあるものなんですよね。きんさん、ぎんさんがお元気のころに、「テレビ出演のギャラを何に使うんですか」と言ったら、その答えが「いやあ、私は老後のためにとっておくんだよ」というのがありました。ああ、そうか、きんさん、ぎんさん、老後をお考えなのだなと。

シニアとか団塊の世代に対していろいろなマーケティングをやってうまくいかないという話がたくさんあり、調査で、「シニアを自分のことだと思うか」と聞いたことがあるんです。実は、50 代で 19.2%なんですよ。残りの、少なくとも 50 代の８割はシニアを自分のことだと思っていないということがわかったんですね。60 代になると 56%ですから、半分を超えていくんですけれども、その 60 代にも、シニアと呼ばれたいかと聞いてみると、呼ばれたい人は 12%なんですよ。だから、９割の人は呼ばれたいとは思っていないわけです。シニア・中高年というのは、こういう時代ですから、毎日テレビや新聞に出てきますけれども、それを見て御当人たちは、「ああ、シニアとか中高年っていうのは大変だな」と思う。いや、大変だなじゃなくて、あなたのことですよと言わなきゃいけない。

博報堂の役員で自分をシニア・中高年だと思っている人間は１人もいないですね。みんなが他人事だと思っているということがあって、何か大きく転換していかなければならない。ＡＲＰ、アメリカの、全米最大の高齢者ＮＰＯですけれども、「フィフティープラス」という言葉を使っているんです。アメリカでもそうなんですよね。サンシティに行ったときに真っ赤なパンフレットがあって、「アクティブアダルト」と書いてあって、何で「アクティブシニア」じゃないんだと聞いたら、「いや、シニアはアメリカじゃ受け入ない」と言っていましたから、同じなんですよ。それで私どもでは、今「新しい大人」というふうに言っていて、なかなかシニアと言えなくて、ちょっとつらい面もあるんです。

今、日本は高齢社会ではなくて新しい大人社会に向かっているということを言っていて、会社をリタイアしても社会はリタイアしない。つまり、生涯生活現役だと。生活者という意味では、もう現役なのだというふうに皆さん本当は思っていらっしゃるんですね。だから、それがもっともっと前面に立っていくようなことになっていくべきだろうなと。そういう意味では、今、檜山先生がやられている、若者をむしろ助けるんだということはすごく大事なことといいますか、それができて初めて本当に生涯現役って言えるという気がしますし、今から始まっていくかなという感じはしています。

澤岡　今日のテーマに戻りますが、関連している話だと思うんですが、ＩＣＴというものをシニアが使って発信をしていくことで今おっしゃったような動きにつながっていくのかなと感じました。

ほかに何か、皆様、会場の中からコメントまたは御質問等ございましたら。いかがでしょうか。よろしくお願いします。

○高齢者の力、その活用方法

（会場Ｂ）　人口問題というのは私たちの抱えている大きな問題で、最近も人口減少あるいは労働力不足、そういうふうなことを言って短絡的に外国人を入れようというような、そんな論議をしていますけれども、肝心なのは日本人が本当に動いているのかと。本当にアクティブに生活をしているのかという、そこのところで問われなければいけないのがシニアの生き方であると思うんですね。そこで、悠々と安楽に暮らしたいという人もいるかもしれませんけれども、でも、安楽に暮らすということと何もしないということはイコールではないはずなんですね。やっぱり政府としても――我々としてもですけれども、政府として特にどういうふうにシニアの力を引き出すのかと。日本の社会にね。まして、それを引き出すこともしないで、あるいは女性の力を、若い人たちの力を生かさないで、ろくな仕事にもつかせないで、200 万円、300 万円で生かせていると。生かせているのではなくて、まさに殺しているんですよね。そういったような状態のままで、その根本のところを動かすことをしないでどんないいデータを見せられても、これが今の結果ですというだけであって、こうしなくちゃいけないでしょう、やりましょうよというのを国でもっと言わなきゃいけない。この場でもやはり語らなきゃいけないなと考えるんです。その意味で、私は、高齢者の力をどうするかということに本当に絞って論議すると。私は、今回のフォーラムはその意味で非常にいい機会だと思いますけれども。そういうことについて、先生方はどういうふうにお考えか、どなたか聞かせていただければと思います。

澤岡　ありがとうございます。今、盛んにお隣で拍手されていた――お三方に伺いたいと思うんですが、拍手されていた牧さんから、いかがでございましょうか。

牧　全く同感なんです。それで、私が今やっている新しいトライ、これをまず完成させていきたいというのが一つ。それを広げたい。広げるときに、どこにどういう方がいるか知りたい。大分わかるようになってきました。どういう活動か。ただ、なかなか見つからないんですよ、草の根でやられている方というのは。みんな悩みを持っているんです。聞いてみると、みんな一緒なんです。これではパワーにならないよねということで、次はこれをいかにパワーにするか。ですから、私、今いろいろなところに出かけていっているんです。いろいろな活動をされている方の所に。やっぱりそこで顔を知って、これはリアルの世界がベースじゃないと、そうするとあとは、一回リアルの世界をやりますと、あとはネットでつながりが。ですから、そういうふうに組み合わせていくと結構いろいろなところにいろいろな人がいて、今日もお名刺をいただいた方も、やっぱりこういう場がたくさんできる、それから事例を紹介し合う。サクセスストーリーじゃないほうがいいかもしれないような気がしますけれどもね。うちはこういうことをやっているという事例が非常に役立ちます。

そういうことで、若いシニアから年寄りのシニアまでいっぱいいるのですけれども、最後の応用、動作は各自別々でもいいんですけれども、その理念に相当すること、パワーに相当するところは、もう是非結束していきたいし、そうすることが自分たちの社会、あるいは日本の社会を、世界に冠たる長寿国になれるもとではないだろうかと私は思っていますので。できることは小さいですけれども、努力してまいりたいと思っています。よろしくお願いします。

澤岡　では、阪本さん、いかがでしょうか。

阪本　そうですね。一つ言えるのは、やっぱり我々の年代というのは、政府がとか、国がとか、社会がどうよと、やっていないじゃないかというふうに言いがちなところがあるんですけれども、それを言っていてもしようがないんじゃないかと。そんなことを 100 万回言ったってどうにもならない。それよりも、やっぱり牧さんがおやりになっているように、もう自分でやれることをどんどんやっていくということが私は最大のポイントではないかなと。試行錯誤がありますけれど。それはもう１人１人が、特に今日来ていらっしゃる方々なんかはそういう前向きな方々ばかりだと思うので、そうしていく時なのではないかなという気がします。

とはいえ、それを今度はできるだけ国なり政府なりでバックアップをしてくれると、スピードが全然違ってきますから、是非、お願いしたいなというふうなところがあります。そういう意味では、先ほど牧さんが言われたので、私も当研究所で何かできるのであれば横連携みたいなことはしたいなと思っていて、内閣府がバックアップしていただければありがたいなと。これは挑戦したい話ですけれども、やっぱり１人１人が主体になっていくということが大事で、それを国が後押ししてくれれば一番いいんじゃないかなというふうに私は思います。

澤岡　檜山さん、いかがでしょうか。

檜山　私も非常に御質問いただいた内容は共感しておりまして、まさにおっしゃるとおりで、これは日本

の産業なり、１人１人の国民なり、皆様が元気で明るい将来の生活をしていく中でも真剣に考えていかないといけない問題だというふうに思っています。

企業とかがまず元気になっていかないと、若い人がシニアを支えるだけの、仕事もできないというような問題もあると思うんですけれども、そういう意味では、今まさに若い人、シニアの人、いろいろな世代が世の中をよくしていこうと思って活動を始めたり、新しい技術を開発していったりということを始めていっているわけなんですよね。それに対して、やっぱり１人１人がというところが本当の意味では大事なのだと思っています。企業が元気をなくしていったり、若い人が元気をなくしていったりというようなところがありますので、やっぱり１人１人が何か変えようと新しい技術を生み出したり、新しい活動を始めたりしているのを何とかキャッチして、それを応援しようと考えていってもらえたら元気になっていくのではないのかなと思っているところです。

澤岡　ありがとうございます。今、お隣の牧さんから、せっかく会場にこれだけ世代がたくさんいらっしゃるので、檜山さん以外の若い人の意見ももう少し聞きたいという、オーダーが…。知っている若い方がいらっしゃいました。

○アナログのつながりとＩＣＴ

（会場Ｃ）　すみません、そんなに若くないです。こう見えても 43 です。

僕は介護保険の前から介護の仕事をしています。今は市川と浦安を中心に、地域の、要は引きこもっている方を外に出すというためにはどうすればいいかという活動を、あとは企業さん向けにいろいろな高齢者体験とかを実際にしてもらって、自分事に考えてもらうという活動をしているところです。

今日、話を聞いていてすごく思ったのが、ＩＣＴ、いろいろな使い方があるのはもうわかっています。いろいろな企業さんと話していても、すごい技術があるのもわかっているのですけれども、生活に密着していないと意味がないんですよね。例えばＦａｃｅｂｏｏｋを使うとか、就労のところまで行く前にいろいろな段階があるんですよ。そこの部分を大事にしなきゃいけないと。さっきおっしゃられていたみたいに、何をしたいのかということを、僕はまず介護の仕事をしていてもそうなのですが、アセスメントしながら聞きます。大体、家族の方がプロフィールを知らないんですよね。例えば、檜山さんのお父さん、お母さんのプロフィール、完璧に言えますか。なかなか難しいと思うんですよ。逆に、牧さん、息子さんか娘さんがいらっしゃったら、その娘さんと息子さんのプロフィールを言えるかというと、言えると答える方が結構多いのですけれども、実際照らし合わせてもらうと全然ずれていますよね。意外に知らないんですよ。そんな知らない人たち同士、親子の仲でもそれだけ知らない。3.11 の後に「絆」ってすごくうたわれた割には、家族のきずなって意外にもろかったりする。それも介護の現場で見ていて思ったんですね。それをまずちゃんとデザインしてあげないと、次のステップに行くというのはなかなか難しいという結論に僕らは達しているので、今、まちづくりとかコミュニティづくりとか結構言われていますけれども、まずコミュニティを作る土壌をつくらないと意味がないよねというのを今僕らのほうではやっているところなんです。なので、どちらかといえば今日は先進事例なのかなという気がするのですけれども、全く社会とつながっていない方たちに対して今後どんなアプローチをするのかというので、皆さんの話を聞きたいなというふうに思いました。

澤岡　ありがとうございます。全くつながっていない人、今日は割とある程度つながっている人、牧さんのお話の中には全くつながっていない人にという働きかけもありましたが、今、御質問にありました、本当に全くつながっていない人、そういったところにどうこれからＩＣＴを導入していくかとか、それからよさを知っていただくか、そういったことに関して、どなたかいかがでしょうか。

阪本　ＩＣＴを使ってということでは、ちょっと直接ではないのですけれども、さっき申し上げたコミュニティサイトの中で、介護に関する家族の悩みをどんどん出していただいた中で、その中から出てきたことというのは今おっしゃったことなんです。介護する立場になって初めてあわてて区役所に電話して、ぐるぐる回ってケアマネさんが来るというのが一般的なパターンだと思うんですけれども、そうではなくて、その手前でもうちょっと知らなければいけないんじゃないかというのはそのコミュニティサイトで思いました。それは手法としては、やっぱりネットじゃなくてもっとアナログなところから、手で書くところからそれを始めたほうがいいのではないかというのは出てきたところなので、今のお話はすごく興味深く聞かせていただきました。

さっきの趣味人倶楽部の話もそうなんですけれども、特にこの年代というのはデジタルだけで完結はしない。そこは若い人と違う。若い人って、デジタルの中で、ネット上で全て完結しちゃったりするということがあるのですけれども、やっぱりさっきの趣味人倶楽部の中でネット上では死語になったオフ会とい

うのは生きている。やっぱりデジタルとアナログの融合というか、むしろアナログの中でどうやってこれを生かしていくのかという、その発想がすごく大事なような気はしますよね。アナログのやりたいこととか、自分がこうしたい、ああしたいという中に、いかにこれを生かすことができるのかというふうに、うまく提供していくことができるのかという、そこのところはすごくポイントのような気はしますね。

澤岡　ありがとうございます。檜山さん、いかがでしょうか。

檜山　そうですね。ＩＣＴを導入するに当たって、いきなりあるＩＣＴサービスをそのまま使ってくださいというのではなくて、柏のほうで就労とか地域のコミュニティ活動というものが、実際にそういうことを考えてやってみたいという人がいらっしゃっていて、その人たちのアナログにやっている活動の中で課題として直面していることとか、それと、本人は気づいていないかもしれないけれども、その活動に対してこういうサービスがあったらもっと効率よく楽にできるのではないのか、そういう切り口からソーシャルネットワークサービスであったり、時間モザイクの就労を支援するようなグループウェア、そういうデザインをやるようにしております。

全くつながっていない人に対してどうしたらいいのか。柏での就労セミナーとかを開催しても、その場に足を運んでいらっしゃらない方とかがそういう対象になってくるかと思うんですけれども、つながっていないというふうに一括りにおっしゃっている中でも、外の人との接点はどこにあるのかというのを把握するところから始めていかないといけないのではないかなと思っています。そのＩＣＴを使うといい、広がるサービスというものに対して、社会との接点になっている人を介して徐々につないでいくような流れを考えていかないといけないのではないでしょうか。

牧　世の中には、ＩＴ技術を適用していく共通の問題というのは、ＩＴの問題ではない問題が多いんですよ。「ＩＴ以前の問題」と我々は言うのですけれども、ＩＴが入る以前の。ですけれども、だんだんそれが今変わりつつあるなと思うのは、やっぱりちょっとしたことで、ＩＴの説明、ＩＴをやろうというのではなくて、ちょっとしたことでＩＴを使えるなというのは、現場にいる人が発想するのが一番いいんですよね。理屈じゃないと僕は思うんですよ。そのＩＴの問題以前の問題を、素地を少しずつ作っていった上でＩＴを定着させていくというのが私としては一番いいのではないか。例えば、先ほどの事例があった認知症の人にＩＴを使えという。最初から言ったら、全部拒否だと思うんですよ。でも、認知症の人も使うんですよ。やりようによってはね。そして、今はもう論文が出始めましたけれども、ＩＴの、いわゆるＦａｃｅｂｏｏｋをやっている認知症の人の認知症の進度が遅くなったとか治ったという、そういう医学的なレポートも出るようになってきています。ですから、そういうふうにＩＴ以前の問題も含めてこうやってディスカッションして、それは私どもでは全てわからないですから、介護をやられている方とか、まさに壁を超えたコミュニケーションで、だったらこうじゃないかとか、いろいろ知恵を出し合って長寿社会の問題を多角的な面でやっていけば、これが世代を超えたコミュニケーション、あるいは縦社会を超えた横社会でのコミュニケーションにつながるのではないかと。だから、ＩＴは一つのツール、そのために必要な共通のツールであるというふうに、ＩＴが何かするのではないということと御理解いただければよろしいのではないかと思います。

阪本　ちょっと補足をいいですか。先ほど、Ｓｋｙｐｅで、テレビの画面につないであげたらすごくおやりになるようになったというお話があった。そこがポイントかなという気がするのですけれども、結局、今高齢者にとってのデバイスというのはテレビなのですね。そこにコードをつなげてあげるというのは意外にポイントかなというね。みんなが使うようになる。だから、そのようなちょっとしたことをうまくやってあげるとか、何かそこら辺は意外なところの一工夫なのではないかなという気はしました。

澤岡　いわゆる一番身近な部分からという。ありがとうございます。

皆様、今日は長いお時間おつき合いいただきまして、どうもありがとうございます。今日は恐らく何かがわかった、何かが決まったというお話はなかったかもしれません。ですが、これからの新しいこと、新しい動きに向けての一つのキックオフのイベントになったのかなとも考えられます。そこに向けて、将来に向けてというような切り口で、最後にパネリストの皆様から一言ずついただけますでしょうか。

阪本　やはり今日こうやって皆様方と御一緒にディスカッションをさせていただいて、大変大きな収穫だったなと思うのは、支えられる高齢者から支える高齢者という、その転換というのが本当に今始まろうとしているのではないかという、そこは少しリアルに感じられたのが大きなポイントでした。やはり情報発信って、受信するだけではなくて発信する側になるというところが大きなポイントだし、それから若者を支えられる可能性が、ほんの少しかもしれないけれども見えてきたという、そこがすごく大きいと思うんですね。

冒頭に御紹介したように、確かに今、ビジネスの世界でも国内市場はだめだから海外へと言われているし、逆に外国人の労働者の方に来てもらわないとだめだという議論もあるしという中で、でもやっぱり急速に進む高齢社会をどうするのかというのは、それは世界のモデルになるんだということがあるわけですよね。まさに皆さん方が、本当に日本の先端に実はいらっしゃるという、ひょっとしたら世界の先端になる可能性があるということがありますので、それを皆様方で御一緒に作っていけるとすごくすばらしいなというふうには思いました。牧さんがおっしゃるように何か連携ができて、それがもう少し見えるような形になるとすばらしいなというふうに思いましたし、内閣府のバックアップがあると確かにいいなとも思いました。

澤岡　ありがとうございます。では、檜山さん、よろしくお願いいたします。

檜山　逆に会場に質問を投げかけたい。質問というか、20 代の方っていらっしゃいますか。――１人。30 代の方。――会場はお１人。40 代の方。――４人。50 代の方は。――になってくると結構いらっしゃいますね。20 代、30 代、若い世代が非常に少ないなというのが、同じ――20 代と一緒にするなと 20 代の人に言われるかもしれないですけれども、そういう印象があります。超高齢社会というのは高齢者だけの問題なのではないかと若い人は考えてしまいがちなところがあって、私は情報系の研究室で研究をやっているのですけれども、情報系の学生ってやっぱり最先端の、何かシリコンバレーで注目されそうな研究をやりたい、高齢者って何だろう、よくわからないから、ちょっとこのテーマは入りにくいみたいなところもあったりすると思うのですけれども、やっぱり世代間交流というところから、世代を通じて一緒に国の未来を考えていかないといけないのではないかというふうに思います。そういう意味で、こういう会場の中にも若い世代が３分の１ぐらいはいてほしいなという気がいたしますので、20 代、30 代の方は、是非仲間をたくさん作って、超高齢社会を議論する場にその仲間を引っ張って連れてきてもらいたいなというふうに思います。

澤岡　牧さん、よろしくお願いいたします。

牧　今日感じたことなんですけれども、私もシニアとして、年は自分で決めろと。自分が何歳かは。与えられて生まれた年で数えるなと。これは大事なことだろうと思います。アメリカのニューヨークの州立大学の先生、84 歳で教授をまだやっているんですよ。アメリカの大学では定年がないんですよ。定年を決めること自体が法律違反なんですよ。日本の大学は、国立は何歳、私立は何歳と言ったら、びっくりしているんですよ。「何で？」という質問が来ました。だから、年は自分で決めようというのがやっぱりこれからの我々シニアの生き方ではないかと。

それから、私、ケネディが言った言葉を思い出すんですよね。国に何かしてくれることを望むな、と。自分が国のために何ができるということを問いなさい。これは私どもシニアに対しても当てはまるのではないかと。

そういうことで、今日ここにお集まりの方それぞれが何かをやっていただいて、頼るのではなくて、これが自立です。それで、これが孤立を防ぐ第一歩だと私は思いますので、今日の私の締めの言葉にさせていただきます。

澤岡　ありがとうございます。牧さんの後でお話しするのは、若い世代としては非常に気が引けるんでございますが、コーディネーターとして最後に締めの一言を述べさせていただきたいと思います。

今、シェアハウスってすごくはやっていますよね。私、実は建築出身でございます。ですので、シェアする住まい方ということで、いろいろなシンポジウムに出させていただいております。そこで話し合われますのが、今までの下宿とか、それから何か共同の住まいというものは、効率化、それから経済的に安価に住める、何か社会のひずみを穴埋めするような部分でシェアということが考えられていたと。ただ、今のシェアハウス、今の、ともに住まうという生き方という住まい方はそうではなくて、お互いの持っているよさを持ち合って、それが、新しいプラスアルファの付加価値が生まれるのが今のシェアハウスの考え方だよねというようなことが最近語られています。そのシェアハウスになりますが、「シェア」という言葉だけ、恐らく今日のこの「シニアと多世代がつながるために」、この一番根本にある部分がお互いの得意な部分を持ち合って、そしてお互いの得意な部分を出し合って新しい社会のプラスアルファの価値観、超高齢社会ってネガティブなものではなくて、新しいプラスアルファの何かの価値観ができ上がった社会が超高齢社会なのかなと最近感じております。このための武器として、恐らくこのシニアのＩＣＴというお話が一つ出てくるのかなと感じておるんですが。

今、「若い世代、出てきてほしいですね」というお話を檜山さんがされていたんですが、若い世代、正直

自分が年を重ねるなんて思っていません。若い学生さんに、「高齢者って何歳ぐらいだと思う？」「ああ、60 歳ぐらい」「65 歳ぐらい」、知識としてあります。「どういうイメージを持ってる？」「寝たきり」「死んでる」「よぼよぼ」。もう、牧さんのさっきの定義から言ったら、みんな死んでいますよね。というくらい、若い子たちは自分の先の姿として高齢期というものを捉えていません。今の若い子たちは、ほとんど全ての子がＩＣＴにつながっています。そういう意味では、シニアの高齢期の方々が主体的に今の社会、自分たちの生きざま、自分たちのすばらしい部分を若い世代たちに積極的に発信していただきたいなと思います。そうすることで、若い世代の価値観というものも徐々に変わっていくのかな。そして、次の会を開催したときには若い子がもしかしたら半分ぐらいいるような、何かそういった動きに進んでいくのかなとも感じております。

ですので、そういう意味でも、今日これをきっかけに、こういった――でも、今日、シニアがＩＣＴを活用して多世代とつながるということに関しては、様々な課題がある、様々な可能性があるということをこの場でまた共有させていただきました。やはりこれで終わってしまってはただのイベントで終わってしまいますので、先ほども皆さん、それから会場からもおっしゃっていただきましたが、多様な主体が、そして多世代がつながって、こういったテーマを何度もみんなで顔を突き合わせインターネットもフル活用して話し合っていく、連携して知恵を出し合って何か新しい動きにつなげていくのが重要なのかなと感じております。

そういう意見が出ておりますので、内閣府が一つの起点になって、これからこの場、今日いらっしゃっている方をみんな巻き込んで、そういったような動きにつなげていけたらなと感じております。

皆様、今日は長い時間どうもありがとうございました。